公明新聞　2026年11月11日付３面

福島に実る 希望の果実

東日本大震災と東京電力福島第１原発事故に見舞われた福島県浜通り地域で育まれてきた「希望の果実」が実りを迎えた。大熊町では、大学生だった若者が３年前に開いた果樹園でキウイフルーツが初めて収穫された。富岡町では、ブドウ栽培から醸造まで一貫して行う「オール富岡」のワイン造りが２年目を迎えている。両町の収穫祭を訪ね、復興へ農業の未来を開こうと挑む人々の歩みを追った。

＝東日本大震災取材班

人と地域をつなぐ収穫祭

東日本大震災 15年8カ月





たわわに実ったキウイ【写真左】と、その収穫を体験する参加者＝１日　福島・大熊町

大熊町「キウイの国」

特産復活へ若者が挑む

「見て見て、たくさん実がなってるよ！」――。爽やかな秋晴れの下、大熊町下野上地区にある農園「キウイの国」に歓声が響く。今月１日、株式会社ＲｅＦｒｕｉｔｓ（リフルーツ）が開いた初収穫祭には、県内外から約１５０人が集まった。

かつて「フルーツの香るロマンの里」と呼ばれた同町。震災と原発事故に伴う全町避難で、盛んだったキウイ栽培は途絶えていた。

リフルーツ代表の原口拓也さん（26＝大阪府出身）と副代表の阿部翔太郎さん（25＝神奈川県出身）は学生時代、大熊を訪ねて果樹栽培の歴史に触れ、起業を決意。２０２３年10月にリフルーツを設立した。翌年からナシ畑だった土地２・５㌶を借り、キウイの苗木を植え始めた。開園から３年目の今秋、待望の収穫にこぎ着けた。現在は約10品種１２００本のキウイを栽培している。

初収穫をめざす今年は強風で枝が折れ、長雨で枯れた木も。環境は厳しかったが、リフルーツのメンバーは力を合わせて地道に一本一本の木と向き合った。

収穫祭では、参加者が主力品種「ヘイワード」の摘み取りを体験。試食会も行われ、果肉の中心が赤く甘みの強い「紅妃」が振る舞われた。川崎市から息子の海斗くん(5)と参加した佐藤杏奈さん(36)は「甘くておいしい！」と喜び、「ＳＮＳでキウイの活動を知り応援してきた。収穫の日を心待ちにしていたのでうれしい」と笑顔を見せた。

今季は約４００㌔の収量が見込まれる。約２週間の追熟を経て、今月中旬から農園の直売所や町内のスーパーなどで販売される。原口さんらは震災前に町が掲げていた「作付面積10㌶、売上高１億円」をこれからの10年でめざしている。



「大熊のキウイを全国に」と意気込む（左から）若井さん、原口さん、阿部さん、中津川さん＝同

＊

大学生になるまで福島とも農業とも無縁だった原口さん。生産者からキウイ栽培を一から学び、中国やニュージーランドなどの産地にも足を運んで技術を磨いた。阿部さんと２人で起業したリフルーツには、24年10月に若井景さん（25＝北海道出身）、今年９月には中津川翔さん（23＝神奈川県出身）が加わった。

活動を応援する町農業委員会の根本友子会長(79)は「若者が諦めずに頑張ってくれて頼もしい。大熊の未来は明るいね」と声を弾ませた。「ここがスタートライン。４人の強みを生かして大熊のキウイを全国に届けたい」。原口さんは力を込めた。

富岡町「とみおかワイナリー」

ブドウが育む交流の輪

ワイナリーツアーでブドウ畑を案内する太田さん（右端）＝10月31日　福島・富岡町



隣接する富岡町では、津波被災地に広がるブドウ畑を舞台に、新たな交流が生まれている。10月31日、ＪＲ常磐線・富岡駅近くのワイン醸造所「とみおかワイナリー」で収穫祭が開かれ、来場者がワインを片手に実りの秋を楽しんだ。

注目は、白ワインの発酵途中で特別に製造された生ワイン「フェダーヴァイサー」。ほのかな甘みとフルーティーな香りが特徴で、この時期だけ味わえる一杯だ。

ワイナリーツアーでは、参加者が普段は立ち入れないブドウ畑を散策。案内役の太田将志さん(37)は、「ブドウ栽培から手掛けるからこそ国内でも唯一無二の個性あふれるワインができる」と強調した。

ツアーに参加した富岡町在住の荻原亨真さん(28)と、いわき市在住の齊藤美空さん(26)は「栽培の苦労を知り、ワインへの関心が深まった。同世代にも富岡の魅力を伝えたい」と語った。

ワイナリーの挑戦は16年、原発事故による全町避難が続く中で始まった。遠藤秀文社長(55)は避難先の郡山市から被災地に通い、町民有志と共にブドウの苗木を植えた。栽培を続けること10年。今では、広さ約７㌶の園地に12品種、震災前の町の人口と同じ数に当たる1万６０００本のブドウ樹が育つ。

昨年には念願の醸造施設が完成し、富岡産ブドウを使ったワインを町内で一貫して造れるようになった。遠藤社長は「富岡は可能性がある町だ。このワイナリーを次の世代にも愛される町の新たなシンボルに育てたい」と、１００年先のまちづくりを誓っている。

ⓒ公明新聞